

essais ころみ 2022年12月

2022年12月1日（木） 晴

昨夕から寒くなってきた。12月になるのだから、そうでなくっちゃ。7日は「大雪」、22日は「冬至」。いよいよ2022年も終わる。

— 食物連鎖 —

一昨日の午後3時半ごろ、地下鉄の駅ホームで電車を待っていたら、後ろのベンチから電話をかける声。「～の～ですが、いつもお世話になっております。社長…」。

みると、若い男性がノートPCを膝におき、画面を見ながらスマホで相手と話している。それも会社内にいるような声のボリュウムと内容。時々他社の名前も出てくる。

当人が名乗った自社名は某有名企業調査会社。この場面をもし上司が見たら、慌てるに違いない。まわりにたくさんの人がいる、誰が聴いているかわからない。「情報」の取り扱い感度はいかに。

若い官僚の助成金詐欺行為、重大裁判の資料破棄、死亡した患者の預金をひき出そうとした医師…。社会の大事なインフラとなる機関や組織の現場は今いかに。

物事の善し悪しの判断、モラルの低下。これが一番気になる。安心して暮らす、仕事する、付き合う、仕事を頼む、など等の大前提。

「今生きている人間は、人が人を食い物にする一種、食物連鎖のようなものをつくりだしてしまったのではないか」と言ったのは、「中井久夫」。いつの頃からは同じように思っていたものだから、目をみはった。

だから自分がその渦中に入って同じようにしてしまわないよう、自制する、自律する努力が今の時代は必要なのではないか。なまじ頭がいいとネットという便利な道具もあるし、やりやすい。

賢くても、ずる賢くはなく。人あたりはよくても、人を手懐けず。心が強くても、弱い人には弱く…。こう続けていくと、けっきょく、老子の中にすべての核心がありそうに思えてきた。読んできた賜物か。

2022年12月2日（金） 曇→晴

個人的には今朝この冬一番の寒さを感じた。ぬかりなく防寒、事務所では他に誰もいなければ暖房はかけない。エアコンの暖房が苦手。これがかえっていいのかも、内と外との寒暖の差があまりなくて。

— 予感と徴候を —

12月に入り、新年が身近になってきた。こころは何となく黄昏、頭には今年のあれやこれやが浮かび、さて来年はどんな年になるだろうかと朧な未来風景が一塊で見えるような、見えないような。

「生きるということを、予感と徴候から余韻に流れ去り、索引に収まる、ある流れに身を浸すことだと考えてきた」（中井久夫）

予感、徴候、余韻、索引。それぞれの意味合いもしっかり言語化してくれている。簡略すると、予感は、「徴候を把握しようとする構えが生まれる時の感覚。明確な徴候以前のかすかな徴候を感受すること」。

徴候、「何か全貌がわからないが無視しえない重大な何かを暗示」。

余韻、「たしかに存在したもの、あるいは状態の“残響”、“残り香”。ただし、存在したものが何かの問題ではない」。

索引、「必ずしも言葉ではないが、過去の何かをひき出す手がかり、一つの世界を開く鍵」。

こうして言語化されたおかげで、「自分をこまかく観察する能力」（モンテーニュ）を少し高め、他者にも伝えることもできる。今年「中井久夫」を再発見したことは、いずれ大事な「索引」になるかもしれない。

今の時期から新年1月にかけて、上記の「予感と徴候から余韻に流れ去り、索引に収まる、ある流れ」を頭の隅におきながら、自分の時間をすごすことを、あなたにも勧めたい。なにより、予感と徴候を。

2022年12月3日（土）

大阪城公園

冬晴れの日、夕方に自転車散歩



2022年12月5日(月) 晴→曇

今のところよく晴れている。予報からこれから曇り空、気温は平年並み、風がないので寒さはさほど身に沁みない。7日は「大雪」。

－ 教養って －

「教養って何でしょう」。これから新規の仕事の準備にとりかかる人が呟くように言った。先方の求めに応えるのに、〈教養〉の足りなさを感じているのだという。せっかくだから辞書をひいてみよう。

「学問、幅広い知識、精神の修養などを通して得られる創造的活力や心の豊かさ、物事に対する理解力。また、その手段としての学問・芸術・宗教などの精神活動」。あるいは、「社会生活を営む上で必要な文化に関する幅広い知識」。

多様な「学び」の先にある、創造的活力、心の豊かさ、物事に対する理解力。たしかに自分ならではの仕事を探究する人にとって、「教養を磨く」ことは、ある意味死活問題にもつながる。

漢字研究の阿辻先生の講義を京大のOCWで視聴していると、なんだか先生が、「こういったことを森鷗外も知っていて、昔の教養人は本当にすごい」と話していた。

大学教授だった知人は、「昔は本当に優秀な人しか大学にはいなかった、行けなかった」、だから教養レベルも高くなるのだと言っていた。

今は大学へいなくても、その気さえあれば、ネットや図書館などの社会的インフラのおかげで、独学もできるし、「幅広い知識」を得ることもできる。あとは、「精神の修養」か。

修養、「知識を高め、品性を磨き、自己の人格形成につとめること」。ここに「学問・芸術・宗教などの精神活動」がくるといわけ。それも〈活動〉であるから、長い時間をかけての、ということを含む。

この一冊で教養が身につく、といった宣伝文句がいかにか短絡的なのか、よくわかる。

2022年12月7日(水) 「女性チャレンジ応援拠点」の部屋にいて、ほぼ満月のお月見



2022年12月8日(木) 午前4時20分頃



2022年12月8日(木) 晴

今日は終日冬晴れのよう。こうして書くことができて、ほっ。昨日音声をアップして小一時間がすぎたときにPCがフリーズ。今朝なんとか復旧して、やれやれ。

－ 問題意識 －

顔写真が出た…。静岡の保育園の「不適切な保育」、逮捕された保育士3人の顔がテレビニュースの画面に載った。ちょっとおどろいた。教師の場合、こんなにすぐ載ったかしら。

顔写真をみて、どうしても想像してしまうのは、彼女たちの周辺。子ども、夫、親、親戚、友人、など等。直接、間接の「風評被害」をうけるのは目にみえている。ネットが輪をかける。

先週久しぶりに会った人がいる。保育士の教育・支援を仕事の中心にしたいと、いま学びをかさねている女性。会ったその直後にこのニュースが広がった。たぶん今頃、自分の業の意を強くしているに違いない。

2004年の終わりだったか、ある日、“女性をアシストすることが、これからの世のためになる…!”と瞬間的に頭に閃いた。2003年から「あきない・えーど」の起業・経営相談にあたっていた頃だった。

相談者には色々な人がやってくる。そのうち気づいた、男性の多くは既存の業でしか物事を考えられないのに対し、女性の相談には、未だ検討の余地はあるが、これからの時代に求められる業と思えるものが多

自分なりの新しい問題意識が生まれた。すると不思議なもので向こうからテーマがやってきた。当所のサイトを見つけたと言う先から女性起業セミナーの講師依頼が舞い込んだ。

保育士教育・支援に意を強くした彼女、たぶん、これから仕事が動き

2022年12月10日(土)

近所の神社のイチョウ



2022年12月12日(月) 晴

朝からよく晴れ、風もなく、穏やかな冬空。今年もおしせまってきた。「コロナ」もあり、忘年会は毎年恒例の「Giro」のクリスマスディナーのみ。テレビで紹介されて一年、まだランチができないほど夜の予約が続いているとか。ジローさん、人生後半に世に出ることになったのはよかった。

ー 言うまでもないこと ー

言うまでもないことを言う羽目になるときの感情というのは、言う側の心の中心に!?が浮かぶから、その反動で語気が強くなり、そうになっていることを自分でもわかるから、気持ちはすっきりしない。

「自分でしっかり勉強しましょ!」。6年ほど前だったか、2,3度は話を聴いた一人の起業家にそう言ったことがあった。勉強会などには参加しているが、よくよく聞くと、自分ではあまり勉強してない、本も読んでいない。小さなショックだった。

人もいいし、自分のやりたいことに熱心だし、あとは勉強。やりたいこと続けていこうと思えば、それに応じた勉強が必要なのは、言うもがな。一つやって終わりということではないので、その時々、自分のアンテナにひっかかったことをやっていくしかない、自分のことだから。

「心の鍛錬しかないでしょ!」。老いて周りの人に頼らざるを得なくなったとき、周りの人たちも気持ちよく世話をする自分になるためにはどうしたらいいか。それはもう、そういう人間になるしかない。

独創には多様な知識を醸成する長い時間が必要になるし、混沌とした社会生活や未来への不安などに埋没しない心丈夫にも長い時間がかかる。長い時間がかかる、少なくともこれはよく了解しておきたい。

2022年12月13日(火) 雨→晴

雨は夜明け前に降りだし、9時前にはやんだ。徐々に晴れてきて、明日にかけてもよい天気のように。ただし週の後半から寒くなるらしいから、いよいよ年の瀬感。

ー 言うまでもないこと(続)・「勉強」ー

勉強も、心の鍛錬も、あえて言うことになった時には、それなりにやっているとという自負は本人の胸のうちにある。率直に言ってそうだけど、だからといって、〈これみよがし〉ではなく、あくまでも「自負」なので、自信と自分にむけての、ちょっとした誇り。

子どもの頃に親から勉強を厳しく言われたことはない。ただし、ごくごく普通に勉強するぐらいは当たり前という考えの環境ではあった。親戚には学校の先生がいたから、年賀に訪ねてきたときには期末の成績を必ず聞かれた。

社会に出るまでは進級や進学という〈通過儀礼〉があるから、嫌がおうにも勉強しなくては行けない。でも社会にでると、大人になると、あとは自分次第。

勉強しているなあと久しぶりに感じたのは診断士の受験の時だった。自分より5,6年前から勉強している人に受験をつよく勧められ、その人より先に合格したのは、たぶん自分なりの勉強方法をとったからだ。

今のところ、過去一番勉強したのは、2010年春から3年余り、あるテーマについて独学した期間は本当によく集中した、なにより楽しかった。自分に真になじむものに出会えたということだろうと思う。

その3年余りの独学のプロセスは、ぶ厚いフォルダーの中の数多くのノート紙片に刻まれている。関連する別のフォルダーやノート類を合わせ、見直すたびに、よく頑張ったなあと、自分を誇らしく思う。

考えてみれば、最初のまとまった勉強＝診断士の受験のときに、勉強についての自分なりの方法論ができたから、独学も途中で断念することなく、自分なりに一区切りつけられるまで続けられたのではないか。

一度はじっくり、一定の長い期間、勉強にとりくむ。これが本人の、〈学習のための学習能力〉を磨き、新しい勉強になだらかに進むことでできる。これこそ、〈体がおぼえる〉ということか。

2022年12月14日(水)

午前中仕事で岸和田へ。駅からもう「だんじり



2022年12月15日(木) 晴

今日は一日冬晴れの予報。気温が低く、風もあり、寒さが身にしみる。冬がきた!という感じ。

ー 言うまでもないこと(続2)・「鍛錬」ー

「心の鍛錬」だなんて、自分で言っておきながら、よく出たものだと思う。たぶん初めて口にした、〈鍛錬〉。強調したい気持ちが引っ張り出したか。だいたい、日常がてつがく、と言っていたのに。

日常生活の中に自分の問われる場面がいっぱいある。それがそのまま〈てつがく〉の「間」。そんな風にはっきりと認識したのは1996年のことだった。最初の事務所での一コマ。

同じ仕事を一緒にすることになった知人、PCが要るけど、本人は持参していない。そこで自分のものを貸して、先に準備するようにした。2時間ぐらいして、そろそろ自分も準備しなければいけないけど、返す様子が無い。言葉もない。“…?”の感。

このときにふわっと浮かんだのが、“こういう風にして自分が試されていくんだ…”、ということ。”同じようにPCがいるのに、人のモノを借りておいて…”というこちらの感情をどうするか。しばらくじっとして、考えた。

感情を言葉にして相手にぶつける、あるいは、態度で示すこともできないけど、それもこれも、なぜ自分がそうしなければならないのか、それはおかしい。わざわざ負の側面を出されてしまうのだから。

結局、何も言わなかった、しなかった。先方が返す時まで待った。ただ言えることは、人をみた、ということ。その人の人間性をみたのだった。そして追って再びもっと決定的な振る舞いがあった。それ以来こちらから連絡をはいっさいしていない。

日常がてつがく。1996年のこのこと以来、ずっと心の中におさめている。そうあるよう努めているつもりである、自分では。それも30年近くになるのだから、そういった意味では、〈鍛錬〉にあたるのかもしれない。

2022年12月16日(金) 曇

昨日から一転、曇り空、気温は上がるらしいけど、朝一番は底冷えを感じた。ひょっとすると、自分の体が冷えているのかもしれない。食で温めるとしよう。

ー 言うまでもないこと(続3)・2つの答え

言うまでもないこと、というよりも、言うに及ばないことを、この流れで書いておくのもいいか。

日常がてつがく、と心にとめた1996年以来、自分自身と自分以外の人や世界について、あくまでも自分自身の見立てながら、少しずつわかるようになった。

そうこうして、今から10年ほど前に自分の中から自分にむけてふわっとわいた答え、2つ。一つが、“わたしはどの時代に生れていても、たぶん、今のようなスタンスでその時代を生きている、そういう人間だ…”。

もう一つが、“本当にごくごく普通の、人間らしい人間…”。悪人ではないけど、マザー・テレサのような善人ではないし、喜怒哀楽に応じて情がちゃんと働くが、かといって埋没しないようにと理性も働く。ずば抜けて頭がいいわけではないけど、自分で考える力はそこそこある。

真にそう感じた。2つとも他人に言うに及ばないことだから、10年間でも数度の場面でしか言ったことはない。

何の話からだったか、一つ目を初めて話した時は、相手の二人とも、クスッと笑った。仕事で知り合い、気どころもある程度は知っている。そのクスツには、言われなくてもわかっていますよ、という温かみがあった。

2つ目を初めて口にしたのは、これまた仕事で出会い、ずっとご縁のつづく人たち二人だった。話の流れで言う気になった。すると、二人とも一瞬、真顔でこちらをじっと見て、「それはないでしょ、普通だなんて」。

その〈普通〉には、ある程度バランスがとれている、という意味あいがある。例えば、少々のことでは怒らないけど、自分の精神性を損なうようなことには、黙っていない。めたらやたらと人を攻撃するようなことはしないが、しかし、人間の尊厳を守る必要が出た時の攻撃性はたぶん強い。

10年前につかんだ2つの答え、もうそれなりの年令なので、これからも変わらないはず。いや、わからないか。

2022年12月16日（金）

知人の主宰する劇団の公演が山本能楽堂であり、歩いて足を運んだ街なかに脈々と続く系譜



2022年12月19日(月) 晴れ

朝から晴天、冬晴れ。気温も低く、風も少しあり、寒い。22日は「冬至」、いよいよ陽地へ。

－ 声、記号 －

今日の〈話す〉で少しふれた本、せっかくだから正しく伝えておこう。『声－記号にとり残されたもの』(工藤進 1998年)の「はじめに－五千年前の声」に次のような一文がある。

「三内丸山の出土品には対人間の武器と思えるものはない。戦う相手が人間ではなかったのだ。重要なことは長老の言葉を聞き、それをそのまま子孫に伝えることである。健康な感覚を十分研ぎすませ、それを誤りなく用いなければならないこの作業に変革や創作は禁物である」。

後漢以降に編纂されて現代まで伝わる「老子」と、紀元前200年前後に帛にかかれたものと、さらに遡ること紀元前300前後の竹に刻まれたものとの内容がほぼ同じというのは、上記のような、古代人の〈ならわし〉、たしなみ、あるいは常識によるよう。

『帛書老子』は1973年に出土し、『竹簡老子』は1993年に出土したらしい。いまは一般に「老子道德経」と言われるけど、帛書は単に「老子」とあるようで、「経」の文字も無く、順序は「徳」が先で「道」が後なのだそう。竹簡の方は2つが混在しているとか。

2500年も前の長老の言葉を聞くことはできないけど、目にはできて、今の時代に応じて、考えさせられる。記号化されたからこうして文化遺産として残った。それも古代人がよく聞いてきたおかげ。

話す・聞く、書く。見る・読む、書く。今もむかしも大事なくならわし。

2022年12月21日(水) 曇り

北浜上空はまだ青空ものぞくが、堺筋からのぞむ南の空はどんよりとした雲が広がっている。夜には大阪市内も雨の予報。明日は冬至。

－ 年越し〈儀式〉 －

さて今年も残り十日となった。新しい年を迎えるのに、大掃除やら何から、年越しの〈儀式〉が家庭ごとにあって、人それぞれにも、自分なりのものがあるのではないか。

個人的にそれは10月から始まる。書店などに新年の手帳やリーフが第一弾並びだした時に、一枚物の蛇腹式年間予定表を買う。片面6カ月、広げれば、半年が俯瞰できる。10年以上使っているもの。

これにすぐ、新年の二十四節気、旧暦1日と15日を書き入れ、法事の日と準備の日をつぶす。その以外にも大事なことを書くがそれはさておき、これらの作業に1時間以上は費やす。

合わせて、オリジナルで作った略系年カレンダーの2025年を用意する。当年から3ヶ年分をいつも見られるようにしてあるので2023年になれば、2025年が必要になるから。

これにも同じようなことを書く。2時間ほどかけて新年や3年先のことを思うことになる。これがそうさせるのか、作業が終わる頃には近未来に現実感が芽生えてくる。さっくり手中におさめたような気にもなる。

蛇腹式の年間予定表は手帳に、略系年カレンダーは毎日開くファイルに。2つを写真に撮ってスマホに保存するが、それはイザという時のため。肉眼で、左から右、上から下に、広く一目するところに意味がある。

10月にいったん〈儀式〉を終え、まだ大事な一つが残っているが、それはこれから。

2022年12月22日(木) 冬至 曇り

昨日の夜から雨、早朝も降ったが、あがって、これから少し晴れ間ものぞきそう。でも週末は「クリスマス寒波」とか。街はにぎわうだろうし、家でじっとしておくのがよさそう。

ー この時季に ー

今日は冬至。そういえば、この名の梅がある。今のこの時季に梅林を訪れる人はほとんどいないが、時々いく、大阪城公園の梅林へ。

今年はまだ行っていないが、観光客、皆が内堀の橋をわたって天守閣を目指すのと反対にの、人のいない梅林の方へ入っていく。

まずは蠟梅の方へ。個人的におさえているポイントがあって、それらを巡る。残念なのは、いくつか無くなっていること。

枯れたのか、別の理由があるのか。『桜伐る馬鹿 梅伐らぬ馬鹿』というから、そういうこともあるのか…。

新年を待たず早いときは小さな黄色い花が一つ、二つ、咲いている。これだけで十分迎春ムード。さて今年はどうか。

梅林は内堀にあり、そこそこ広く、中央の空地に立つと、天守閣からOBPの高層ビルが一望できる。

この梅林には以前、有名な二人の熟年男子がいた。一人は「絵描き」、もう一人は「パフォーマー」。

絵描きさんは早朝から梅林で絵を描いていた。桃の季節には桃園に。訪れる人たちの中には、側にとまって、キャンバスを眺めながら、談笑していく人がいる。わたしもその一人だった。

パフォーマさんは、人をよろばせるのがいかにも好きそうな小太り白髪の〈いたずらっ子〉の風。

クリスマスの時はサンタの着ぐるみで、梅林内と外を闊歩。たくさんの人に写真を一緒にとせがまれ、うれしそうだった。

二人とも見かけなくなったのはいつ頃だったか。何故なのかは推察できる。いま、ラジオから「アベ・マリア」が流れている。

2022年12月24日（土）

大阪城公園梅林

気温はぐっと下がったけど、意外に晴れた。22日の〈書く〉に梅の「冬至」のことを書いたので、自転車で行ってみることに。しっかり咲いていた。



2022年12月26日（月）

年末恒例のGiroディナー女性3人会

ちょうど一年前に「オモウマ」で紹介されてから今もランチはできないほど、夜の予約が続いているそう。東京からリピーターで来る人もいらしく、ジローさん、長年そのままにしていた抜け歯を入れていた！



2022年12月26日（月） 晴れ

24,25日とクリスマス寒波に構えていたけど、大阪市内は土曜は終日晴れた。昨日も夕方までは晴れたり曇ったりで気温も10℃近くまであがった。今年越しウィークは穏やかなお天気が続きそう。

ー 〈場〉を変えると ー

だれでも自分の慣れ親しんだフィールド・〈場〉で日常をすごしている。おたがいに生活文化はちがっても、それもある程度はわかり合っていて、何をするにも歯車が合う。合わないなら、合わないなりに。

先日、おたがいにあまり知らない、でも共通の目的で集まった〈場〉のこと。5、6人ほど来るようになっていたが、早く着いた人と二人きりの時間が少しあった。

こちらから話しかける。先方はちょっと引き気味に短く応える。続けてまた話す。すると、まだ引いている。あと2回ほどそういった感じが続いた後に、ようやく先方は少し自分からも話し出した。

皆が集まり、目的のことも済んで、お茶の時間になった。最初に話した人の仲間が二人来ていて、3人が集まり、話した。イスが空いていたので、「ご一緒させていただこう」とすわった。

集まったのは全部で7名だった。3人のそばにわたしがすわり、近くに二人がすわり、離れて一人がすわった。7名一緒に一つのことをしたのに、皆で語るということがない。

3人のそばに座りながら、3人から話かけられることはなかった。もう自分から話しかける必要もないと感じた。二人は二人の話、離れて一人はただお茶を飲んでいる

“なんなんだ、これは…”。いったんトイレに立って戻ってきた時に、二人に話しかけ、離れた一人にもふって、最終的に4人は4人の会話になった。3人は3人のままだった。

“なんなんだ、あれは…”。駅まではけっこう距離があったから、帰り道、すぐに考え始めた。でもすぐに、“いやいや、たぶん、自分の方が出過ぎたんだ…”。

初めての人や場ではしばらく様子を見る人の方が多いという。初対面でもごく普通にしゃべるというのは自分のフィールドではそうでないと仕事にならないという面もあるが、場と立場が違うとそうとは限らない。

ぶしつけな人と思われたに違いないけど、それもそれ、やむなし。そう割り切った頃に駅についた。

2022年12月28日(水) 晴れ

うすいベールの雲がところどころ流れていて、冬晴れの空にすてきなニュアンス。予報によれば年明けにかけても穏やかな天気のように、大阪は。社会的にも穏やかな年末年始になりますように。

—御用納め—

官公庁も企業の大半も今日が年内最後の仕事日。明日から大晦日までの3日間はどこも誰もバタバタと迎春準備をし、ほんと一息ついたところで年明け。

ちょうど4ヶ月かけて今月8日に読み終えた「老子」、〈道〉をもう一度いくつかピックアップして音読するその最後にしていた第37章が今日になった。期せずして、よい締めくくり。

全81章の中で初めて筆写しておこうと思い立ったのは第63章だった。現実にはそくして、『日常業務は戦略的業務を駆逐する』の大元のような気もする。『老子訳注』(小池一郎)では次のように訳してある。

何もしないようにする。何事も起こさずにいる。味のないものを味わう。小を大とし、少を多とする。怨みに報いるに徳を以てする。

難しいことは、それが易いうちに手を下し、大きいことは、それが小さいうちにしてしまう。天下の困難は、易いことから起こり、天下の大事は小さなことから起こる。

それで聖人は、最後まで尊大にならない。だから偉大な事業を成し遂げることができる。軽々しく承諾するものは、めったに信用できない。

そもそも始めに易し過ぎれば、必ず後で難しくなる。それで聖人は、易しいことに対してさえもこれを難しいものとして対処する。だから、最後まで困難に遭うことがない。

この63章を半紙2枚に同じものを書いて、手帳とスマホのポケットにいった。〈書く〉というプロセスが頭に記憶させ、心に残させた。特に、「易しいことに対してさえも…」の部分は。